

---

# セックスと優男

いっしゅ～

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

セックスと優男

### 【Zコード】

Z0675P

### 【作者名】

いっしゅく

### 【あらすじ】

隣の家に引っ越してきたばかりの女の人とセックスしてしまったついに童貞脱却を果たした主人公には、これからどんな生活が待ち受けるのか?『恋のあり方』をテーマにした恋愛小説です!

## 第一話 むつりと優男

子供の頃は、テレビとか本に限らず大抵のエッチなものを敬遠してきた

多分親の教育的にそういうものはいけないって教わってきたからなんだろうけど、とにかくその存在自体を否定して認めてはいけないものと理解して、ずっと長いこと遠ざけてきていた

自分が覚えている中の子供に聞かれたら困る微妙な質問は、俺の場合は「せっくすつて何?」といった直球なものだつたと記憶しているのは笑い事としても、アニメとかで女人の人気が艶かしいシリエットとか女の子の変身シーンとか、或いはエッチな言葉を使つていたつてそれだけで拒絶してきたのだから、我ながら何て融通の利かないガキンチョだつたのだろうと思う

せめてもう少しでも柔らかい脳みそをしていれば、その分マシな人生（二十歳で人生つて表現もどうかとは思うが）を送る事が出来ていたのかもしれない

そんな頑なとも言える生き方の中で、初めて夢精してしまった日には、そりや～驚いたもんだ

「1Jの歳でお漏らし！？」なんて起き抜けに眩暈を起こしてしまつたし、何でおしつこがこんな白くてしかも妙に生臭い匂いなんだ？とかつて疑問に思つ程度の知識しかなかつたわけで（後々それが生

理現象であることを知つて男つて変な機能がついてるんだなと思つた)、素で病氣かなんかじゃないかと疑つてしまつたくらいである

中学に上がつてからもH口敬遠傾向には名残があり、さすがにアーメ程度で拒絶反応を示すことはなくなつたとはいえ、周りで繰り広げられる男子トークにはほとほと嫌気が差しているくらいには抵抗感を抱いていた

正直よくもまあ人前で、しかも女子がいるその目の前でそんな話が出来るもんだと軽蔑さえしていたくらいだつたのだ

・・・けれど、それはあくまでも表面上の話

普段はあいつらは一体何が面白いんだろうって斜めから見ながらも、その実やっぱり俺も男の子で、影では女体には人並みくらい或いはそれ以上には興味津々だったし、深夜のエッチなテレビを見るのもほぼ日課になつていた

一言で言えばむつりスケベなわけだ

まあ、俺と同じ人種は他にもいるだろうし特別なことでもないわけだが、どうも思い出すとこの頃にはすでに『むつり』つてのが悪口からかう意味合ひになつていていたようだ

ついでに思い出すならば、初めて手にした(拾つてしまつた)エロ本は緊縛モノの写真集で、テニスボールやらラケットやら、はたまた体育用具やらを活用した、まあこう何というか、初めて手にするものとしてはややアブノーマルっぽいものだったように思えなくもない(今は好きなジャンルだけど)

ともかくそんなこんなで密かな劣情を抱いていた中学時代も過ぎ去つて、寒々しい高校時代、さらには大学生・・・つまり現在に至るわけだが、それだけの時間が経つてもむつり回路は基本的には相変わらずである

人前でその手の話をするのも態度をあけっぴろげにするのに抵抗があるし、自分の趣味傾向を友達連中に話すつもりも毛頭ない

そんな話をするくらいなら個人的には大人しくゲームの話でもしていた方が気分的に断然に楽なわけだ

そりや僕だって別に硬派を気取っているわけじゃないし、当然女に興味が無いはずもなく超アリ

毎日最低一回は又いているし、親に隠れてAVを鑑賞していたことだって間々あるし、普通に彼女は欲しかったし、あわよくば女性教師とねんごろになる」とさえ考えていた

とまあずっとそんなだったから、きっと多分大人になるまでは、俺つてこのままなんだろうな」とすら漠然と思つていたわけだ

．．．一応、今日までは

「どう？．．．気持ちよかつた？」

ベッド上の隣でうつぶせになつている彼女が、俺にうつ尋ねてくる

「．．．．．．．．．．．」

けれど、俺はその問い合わせして何の言葉も吐く事が出来ないしその元

氣も・・・一箇所以外はない

もちろん恐ろしく気持ちよかつたし、中に入っている時のねつとりとしたような、その蠢いているような感覚には歯を食いしばりざるを得なかつた

これが挿れるつてことなんだ、と感動さえ覚えた

もつ単純にオカズを利用すつよりも十倍以上の快楽だつたと言える言葉を重ねてしまつが、世の中にこんな気持ちよさがあつていいのか?つてくらい衝撃的な出来事だった

なのに、俺の思考はそんな本能煩惱よりも現状が理解できない方にやや傾いている

ところうちは、頭の中で理性的なことを考えていないと、自分の中の何かが決壊してしまつのような心持になつていた

ともかく完膚なきまでにイカされてしまつた身としては、今までの俺の生き方と今敗北感とを含めて、とても彼女に何かを答えることは出来なかつたのだ

「ふふ・・・」

そんな無反応の俺を見てなのか、彼女は俺を見て楽しんでいふような微笑を浮かべている

もしかしたら氣付かぬうちに悔しそうな表情でも浮かべてしまつていたのだろうか?

だとしたら、尚更の敗北感だ

せめて一矢くらいい報いてやりたい気持ちに苛まれてしまつ

でも . . .

それにしても俺は、何だつて大して知りもしないような彼女と、その彼女の部屋のベッドで、二人して裸で横たわってしまっているのだろう

確かたつた30分前までは、俺は女とも女の体とも縁もゆかりも繫がりのつの字もないような生活をしていたはずなのに . . .

俺の家は一戸建てである

木造一階建て築5年くら二のよくある感じの一軒家

部屋分けとしては3ルーム+ウォークインクローゼット

一階がダイニングと両親の和室、それと中々に大きめの洋服収納

でもつて二階の一部屋がそれぞれ俺と姉の部屋として配されている

ちなみに、ここに引っ越してくる前はずっと狭い2Kのアパート住まいだったのだが、それがいきなり2倍以上の広さを有する戸建てを購入したっていうのだから、親父とお袋の頑張りには素直に感嘆してしまう

だからこれで、もう少し俺の部屋がマシだったのなら本当に何の文句もなかつたに違いない

逆に言えば、俺は今の部屋に不満があり、言つてしまつと俺の部屋は口当たりが悪いのだ

灰色の世界くらいには言つていいと想つ

ところのも真正面にはお隣さんの家があつて、7割ほどがお隣の壁と窓に塞がれているような有様なのだ

はつきり言つて気持ちが沈んで仕方がない

対する姉の部屋は南向き口当たり良好のしかも広い部屋で収納も俺の部屋の倍というあからさまな好条件

そんな歴然な差があつたものだから、この家に引っ越してきた当初は当然のように散々抵抗していたものである

けれど結局、お姉さま権限発動により今の湿氣っぽくて薄暗い部屋に宛がわれてしまうことと相成った

全く持つて負け犬人生どこまで続くつて思つてしまつたくらいだ

ともかく俺はこうして、ほぼ常時明かりをつけていなければならな

い部屋で暮らす羽田になつたのだった

最初に気になつたのはお隣さん・・・だったのだがお生憎様

魅惑のお隣さんは空き家だつた

家的にはそこそこ古い感じで、規模的にはウチの家を同じくらこの大きさがあり、どうやらウチの家族が住み始めた時から、或いはそのままずっと前から誰も住んでいる気配はなかつたらしい

だから、窓に向ひのカーテンもいつも締め切られたままだつた

欲を言えば、テレビやゲームでよくある隣の女の子とのドッキリ遭遇を多少期待していたのだが、そんなマンガやアニメの話は早々あるものではないわけだ

だが逆にむやくらしくて男の笑い声とも縁はなかつたわけで、住めば都の理通り、俺は普通に湿氣つぼくも穏やかな毎日を送ることに成功していた

実際、一人部屋というのは初めてだつたこともあり充実のオナーライフを満喫していたのだ

・・・が、けれどそれはすでに一ヶ月前までの話

つまり今は、もうすでに人が住んでしまつてゐるわけだ

最初は正直うんざりしていた

だつて今までずっと何年も静かに過ごしてきたのに、これからはお

隣さんを意識しなきや ならないなんて面倒くさこじの上ない

ただでさえ姉貴の鬱陶しいちよつかいがあるにも関わらず、この上お隣さんの影を気にしなければならないなんて、本気でやつてられない話だ . . . なんて思つていたのが29日前のお話

我ながら現金なものだとは思うが、仕方ない

だつてだつて、男の子だもん

てなわけでつまりこういつ事かと言えば、俺のお隣の部屋には何と念願の女の人に入つてくれただ

案外マンガやアニメの話つてのもあるらしく、事実は小説より奇なりとはよく言つたものだと感心してしまつ(つてこれだと使い方が違うか?)

だとしたらもしかしたら或いは、窓を開けておはよつイベントとか、はたまたカーテン開けたらイヤーンなお約束とかまであるかもしない、とか考えていたのだが . . .

いや、本当に事実は小説より奇なりとはよく言つたものである(今度は使い方も合つているだらう)

何しろ今日俺は . . .

もし良かつたら、私とセックスしない?

と、何となく窓を開けて、この一ヶ月で初めて彼女とタイミング良く目が合った瞬間に誘われていたのだから

## 第一話 初エッチと優男

幾分か訂正がある

前回俺は、まるで彼女とは初めて会ったような言い回しなつていたが、それだと微妙に誤植がある

何故なら俺と彼女とは一応初対面ではない

確かに初めて目が合つたというのは本当だが、それでも一応お隣さんなわけで面識くらいはさすがにあった

そりやもちろんツーカーな仲なわけはないけれど、お隣さんとして挨拶くらいはちゃんとしていたし、俺が朝、大学に向かう際にバッタリ出くわしたなんてこともあって簡単な世間話くらいはしていた。だから彼女が〇〇であることも知っていたし、最近仕事を面倒がっているのも聞かされたりもした

そんな普通に血口紹介をして、彼女の名前が、柳沢な（やなぎ）さわな（さわな）さんであることも分かつていた

ついでに言えば、かすかに鼻先に触れた、彼女の甘い匂いだつて覚えている

有体に、そして低俗に言えば、俺は彼女に僅かには好意を抱いていたんだとも思う

まだとしても、さすがにいきなり肉体関係を求められたのには驚

いたけど

・・・うて、いい加減俺の横道遠回りも酷いか

いつになつたら核心部分に入るんだよつて感じだ

あつとゞせみんなもその大事な部分が知りたいんだりうしわ

つてことで、改めて順を追つていこうつ

ん？やっぱ引つ張つてると思つか？ああ当然だ引つ張つてるとも

だつて俺的にもまだ状況が把握できていないからな

ともかく今日の俺は大学の講義をサボつて家にいることにしたんだ

何故かと言えば社会学講師のおつさんは声が小さくて聞き取りづら  
くて行くのが面倒だつたから

単位はレポート提出なので大した問題ではないのは分かつていたし

てな訳で、今日は朝からずっと家にいた

でもそれだとあまりに時間を持て余してしまつたもんだから掃除を  
始めたんだ

それに無性に床の汚れが気になつてさ

だから換気も兼ねて窓を開けたら、そこには彼女・・・柳沢なぎさ  
(やなぎさわ なぎさ)さんが窓を開けたままで・・・

「ふううう～～～」

「はふあつ・・・・・?」

回想の途中で突然耳元に息を吹きかけられて、左肩を竦めてしまつ  
しかもゾクゾクっときたもんだから妙に情けない声を出しちゃ  
ていた

でも急にそんなことされたら誰だつて腰碎けになつてしまつと思わ  
ないか?

「 もへ、何をやつさからボケ～つしててるの?エッチした後でその  
まま女の子をほつといちやダメでしょ?」

見ると、お隣さんは氣だるげな笑みを浮かべたまま、少しだけ細め  
た瞳で俺を見つめてきていた

・・・と思つたら急に口元を近づいてきてキス・・・と見せかけて

はむつ

「ほわつー!?

ゾクゾクってきたよー・背中ゾクゾクって!

「あ、耳感じやすいんだ」

「や、やめてください…」

俺は必死の抵抗をしようと/orして、でも力加減が分からなくて柳沢さんの肩すら掘めず、そのまま起き上がってしまつ

わいつきまで彼女の全身を隈なく弄つていたのだけど、素になつてしまつと恥ずかしいやら堪らないやらで堪らなくて堪らない

「何よ、これくらい別にいいじゃない。たつぱり堪能したんでしょうなうちよつとくらいい弄ばれなさいよ～」

「もてあそ・・・つて・・・」

うわダメだ

どいつも彼女の言葉の言い回しが俺の今までの日常とは口ひ違和感がありすぎて、もうそれだけで全身が熱くなつてしまつ

それに完全ヌードな女の人人が自分の隣でうつぶせに横たわつていて、しかも俺だけが起き上がつているこのアングルからだと、ど、どうしてもお尻がつ・・・すべすべなお尻が丸見えで・・・っ！」

「あらら、また大きくなつて反り立つちゃつてる。ヒツチな子ね～」

「うあつー…?」

思わず膨れ上がつてゐる局所を両手で隠してしまつ俺

何と言つとか情景反射・・・じゃなくて条件反射だった

もつ句と書つか情けなさいに極まりである

「ふふふ・・・」

なのに、そんな俺の醜態を見ても彼女は妖しく笑つて・・・一言

「もう一回、する?」

と、俺の顔の側へと自分の顔を寄せてきていた

あ〜、いやもう・・・話がドンドン脱線していくといふか、本題にも入つてないのにダラダラしちゃって、その・・・申し訳ない

コレでも俺は本気で申し訳ないつて思つていろいろんだ本当だぜ?

だけど、こればっかりは許して欲しい

何と言つても俺は初めてだし、お相手にイーシアチブを握られてしまつのは当然のことなんじゃないかとも思つて、加えてAVの中でも見たことのないようなプレイを体験をできるとなれば、それはもう濡れ手に泡・・・じゃなくて粟なわけで抗しようのない本能な

わけで据え膳食わねば男の恥なわけで、だから、とてもじゃないけど立里ト貝な俺には何一つ、止めることなんてできなかつたんだつて本当にさ

さつき部屋の窓を開けたらシースルーな彼女が眼前で頬杖をついていたことに顔を赤らめてしまったのも

何故か薄く妖しげに微笑まれてわけが分からなくなつてしまつて気付けば股間の膨らみを隠していたことも

しかも突然セックスを求められて、なまじ頬を撫でられちゃつた上に女の人の甘い匂いに参つてしまつたのも

目の前の光景に自分の欲望に歯止めなんて掛けることもせずに、窓から窓へ飛び移ってしまったのも

入れるのも出すのも、もう何から何まで本当にとてもじやないけど、止めるだなんてそんなこと、できる余裕はなかつたんだつて

だからちょっとくらい枷が外れちまつても、それは仕方のないことだつて思わないか?つて、思わない?

いや、ここは思ってくれよ頼むから

「君、好きな子はいる?」

合計3回ほどの行為が終わった後で、なぎわさんはブラジャーを付けながら俺にそう聞いてきた

「え?」

俺は下着を着けることは見られたくないというなぎわさんの提案により、不可思議に思いながらも背を向けていたのだが、思わず振り返つてしまつ（なぎわさんも、後ろを向いていて助かった）

「だから好きな子、恋人、愛人、ラマン」

「いや、前半も後半もこませんけど」

今まで凍えるような灰冬を過ごしてきたのだ

恋人はもちろん、妾もセフレもいるわけがない

「ホント? 好きな子も?」

俺の答えに下着は付け終わつた彼女が少しだけ驚いたようにして振り向いてくる

「…まあ、まあ」

彼女のそんな表情の意味を図りかねて（あ、いや意味なんてないんだろうけど）、俺はついつい目をそらしてしまう

それはなぎわさんを含めてに気になつた子くらいはいたけれど、今

は生憎と『好物』とまで言える相手には恵まれていな

そんな相手が、こんな俺の前には現れたことなんて一度たりもあり  
はしない

でも・・・

だけど今は・・・どうなんだろう

なし崩しにとはいえたんてしゃって、その間にはファーストキスまでしていて、すぐ、気持ちよくて・・・喘ぐ女人を可愛いいって思っちゃつたりして・・・

「好きな人、か・・・」

俺は別に今まで頑なに操を守っていたわけでもない

表面上エッチなことを敬遠してきたとはいえ、普通に彼女は欲しいと思つていて、やっぱりエッチなことをしたいとも思つていた（実際そつなりたい相手も今までの人生の中で2人ほどいた）

ただ、やっぱりキスもセックスも、好きな相手とするべきだつていう考えは今も持つていて

「マサトくん

なのに、もう済んでしまったとはいえ、どうにも今の状態に抵抗感があるのは否めない

「正人くん」

もちろんなぎさんとの事を後悔なんてしていないけれど、でも何て言つか……俺はなぎさんのことと一緒にどう

「正人くんっ」

「え？」

突然の声に、一瞬誰が呼ばれたのか分からなくてしまう

マサト？ 正人というのは……

つてアホか俺は、正人ってのは俺の事だろうが

前に自己紹介し合つただろうが

「いじりじり、人の話はちゃんと聞かないダメだよ?」

「え? あ、いや聞いてましたよ聞いてました。えっと好きな人はってことですよね?」

「いやもうその話終わってるし」

「え?」

あれ? いつの間に?

でも確かに、なぎさんも下着の上にもう例のシースルーな……  
ネグリジェ? を着込んでるし

てか、何でそんなスケスケを着てるんだ？」「第一冬とか寒くないのだろうか？

「まつたく、君って子は本当に耳が弱いだから。もし好きな子の前でもそんなんじやあつという間に嫌われかけつよ？」

「え、あ・・・はい、すみません」

しかも一瞬にして今までしていたなぎささんへの願望妄想を最初の段階で碎かれてしまつた感じだ

まあ実際、こんな長い時間一緒にいるのが始めてなわけだから、好きかどうかなんてありえないんだろうけどさ・・・

「なんか君・・・落ち込んでる？」

「え・・・いや、そんなわけないですよ？」

思わず一瞬目を見開いたようになつてしまつが、そんな彼女の疑問を手を振つて否定してみせる

まさか初めての人は好きな人・・・なんて古風っぽい、しかも俺個人として情けない話をするわけにもいかないし

「そう？ならいいんだけど・・・あ、でもそつだ。今更だけど、ちよつとだけ、聞いてもいい？」

「あ、はい。何でも」

「でも何だろう？」

あ、今日は大学はどうしたの、とかか?

「その、さ……ひょっと聞きこくい」となんだけど、ね?」

「？？？はい」

「君……初めて、だつたよね?」

「つー?」

ハ、ハジメテ?

初めてつてのはつまつせつこうことだよな?

ででも、何故分かる?何故分かつた?

「ま、まあ、そりだよねえ……」

そんな俺の驚き顔を見て、なきせんは「あぢやー」みたいな痛そ  
うな顔をしてくる

つて、自爆つ!

「えつとー、じゃあむつ一個いい?」

「？？？はい」

へへつ、もつ絶対顔には出せないこ

「キスくらー、した！」とあるよね？」

「あ、りまふよ?」

歯んじゅつた～っ！～

「う、あ、～～～～～」

これまたなぎさんは天を仰いだようにして、俺にはよく分からないダメージを受けている

えつと、つめこいの反応は……バレてる、んだよな？……だつたら

「あ、あの・・・すみません・・・やっぱ俺・・・下手、でした?」

もしかして俺が始めてつてことで何か気に障つたことがあるかも知れないし、そりやもちろんやつぱり情けないことこの上ないのだけど、ここは謝つといった方がいい……んだよな？多分。よく分からぬいけど……

と思つていたら突然、なぎさんの方が目の前で手を合わせて

と、本気で力をこめたような謝罪の言葉を述べていた

でも、一体誰に？？？ついでいやいや、ここ元は俺しかいなか（もしかしたら彼氏さんかもしないけど）

「いや、私ももしかしたらもしかしたらスル前から多分そうじゃないかな」とは思っていたんだけどね。でも見た目も結構今時の子だし、だから経験なんてとっくの昔にしておつて思つちやつて……。その、ね？」

「は、はあ……」

言つてゐる事は、まあ分からなことでもない

つまりは俺の初めてを取つちやつてじめん……ことなんだろうけど

ただ、謝られる程の事かどうかは微妙な気がする

ん~、やっぱり男と女では初体験についての価値観は違うのかもしない

「はあ……でもまさか本当に童貞くんだったなんて、ホント失態だなあ私……」

「うぐ……」

童貞って言葉には、どいつもまだ拒否反応があるな

そりや確かに事実なんだけど、何となく言葉そのものを否定したい感がある

正直自分でもよく分からぬ感覚だ

にしても、いつの頃からエッチしていないうじがマイナーで情けな

い男のステータスになっていたのだろう

思い返しても、そのタイミングがよく分からない

まあ、いつか……今の俺は、一応は童貞でも素人童貞ってわけでもない……つてことになつたんだろうから、多分

「でもその、なぎささん？ なぎささんが謝らなくてもいいですって。俺は別に気にしてないです……というかむしろ嬉しかったですし……てかそもそも俺の方こそ本当に」「めんなさい。こんな急に、流れのままにしちゃつたりして……」

本当にそうだ

例え誘われたような感じだったからって、あの場面で、俺は本当は断るべきだったんだ

所詮俺となぎさんは知り合いでしかないのだし、それなのに関係を結ぼうだなんて、そんなの本当はあつてはいけないと思つじ

「……ううん、君は悪くないよ」

なのになぜわせんは、とても静かに、俺を庇ってくれているようだつた

逆に自分が深深く……とても深く、後悔しているみたいに

「あ～あ～、不安定だったのかな、私

「……不安定？」

もしかして、何か問題があつたとかか?なんてことを聞いひつとする  
前に

「え?ああ、気にしないで。別に、大したことじゃないから . . .  
なんて、とても嘘くわこよくな気がしないでもない風に言つて、ち  
ょつとだけ寂しそうな顔を浮かべていた

・・・」はあつと、何も聞かない方がいいんだろう、多分

「あの . . . ジャあ一つ、別の事聞いてもいいですか?」

俺はその空氣を変えたくて、聞いてみたかったことを尋ねる」として  
する

なぎわさんは「いいわよ」と言つてくれ、だから俺は、内に秘めて  
いる自信の無さを誤魔化したいという気持ちの表れでもあつたのだ  
ろう、この質問自体の意味の無さを理解しつつもその問い合わせを訊いて  
みた

「あの . . . 気持ち、良かつた、ですか?」

「え?」

なぎわさんは少しだけ虚を突かれた風になつて、でもすぐには度は  
微妙な顔を浮かべる

「ほりえつと、僕つて初めてだつたりしましてだから、女人を満  
足させられたかどうかが気になつていてやつぱり、男としてはお相

手にも気持ちよくなつてもらいたいと言こますかそあるべきではないかと言いますかなので……もし良かつたら、教えて貰えないでしょうか?」

俺は何をじとな焦つてまで、そして何を聞いているのだらつ

それに気のせいか、この質問をしてくる時点でかなりの敗北感が付  
き纏わないでもない

やつぱつ、こんなこと訊くんじやなかつたと思つてしまつ

「ふふふ……まつたく想つてすは、全然初めてのくせにして……」

「あの、すみません……」

何がすみませんのか、よく分からなにかどつこ謝つていた

ビービー俺はいつも弱腰なんだから

けれど、どうやらなれわんは聞こえてくれるひじへ、つこつ  
こじへつと喉を鳴らしてしまつ

「えへ、わうねえ……」

「は、はこつ」

これは微妙に緊張の瞬間だ

あの意味男の甲斐性に対する審判と言つてもこいかもしねない

「ふふ・・・うん、気持ちよかつたよ」

「あ・・・」

だから俺はその答えにホッとするを得なかつた

つまりそれなりにできただつてことなんだろ。良かった・・・

「ちよつとだけね」

「う、」

つて、ここでそんな期待をせむるよりなこと聞こますか？

マジ今の俺の安心感を返せー！

そりゃ、下手くやつて言われるよりはマジだけ

「ほらほら、へこたれない。まだまだこれから機会はあるんだから精進なさいな」

「は、はあ・・・精進すか」

こんなのがいついて鍛錬するかなんて知りませんよ

てか、どんな会話だよこれ

自分で振つといでなんだけば相当のセクハラ発言だよな？

「ん~、でもそうだね。君のその精神は、大事にしなよね？」

「はい？」

その精神？どの精神？セクハラ精神ってこと？いやまさか……

あ、もしかして聞き違いで精子だった？

精子を大事にしてこれからも使えって事？

つてそんなバカな

それこそセクハラ精神だ

「だから自分だけじゃなく、女の子もちゃんと気持ち悪くさせよう  
つて精神をだよ」

「…………はい？」

なんだそりや

普通に意味分かんねえって

「つまり、世の中自分勝手な男が多いってことだよ。ホント嘆かわ  
しいよね～」

「は、はあ……」

自分勝手？

いや、今日の事とか、俺も結構自分勝手な方だと思つけど……

全くもって、年上の女の人の思考はよく分からぬものだ

突然エッチに誘われるし、しておいた上で俺が謝るべきところを謝つてくるし、今回のこと不安定で片付けようとするし、それでも年上ぶるうとしているし、俺じゃとても頭がついていかないっての

これなら社会学の講義の幾分か楽だったに違いないくらいだ

もちろん、今日大学に行かなかつたのは完璧な正解だつたと思つけどさ

ともかくその日から、俺となぎさんは、それこそマンガやアニメみたいな窓向かいのお隣さんになつたわけだ

はてさて、これから一体どうなつていくんだろうね

ともかく色々期待しないように暮らしておいた方が無難かな、多分

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0675p/>

---

セックスと優男

2010年12月30日07時11分発行